

---

# 成り行きで悪人になりました

とおぼえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

成り行きで悪人になりました

### 【NZコード】

NZ0636NZ

### 【作者名】

とおぼえ

### 【あらすじ】

王殺し！？謀反！？知りませんよそんなこと…！

平民上がりで見習い魔術師のフォルティアは、陰謀に巻き込まれ、身に覚えのない罪を着せられる。全ての権利を剥奪され、牢に入れられたフォルティアはしかし一人の少年に助けられた。

「お前、魔法とか打てないわけ？さつさと蹴ちらせよ」「て、助けてくれるんじゃなかつたの！？」「いや、俺平和主義だし。兵士怖いし。赤の他人のために手を汚すとかありえないから」「あんたね……！」

眞面目で苦労人の少女とドSで我が道を行く少年が繰り広げる、  
ドタバタコメディーここに開幕！！少女の行く道に平穏はあるのか。

「都合主義が多く出てきます。そういうものが苦手な方はご遠慮  
ください。 本文を書き直しました。

チート主人公

## プロローグ 誰かの小さな独白（前書き）

初投稿になります。未熟者で至らないところもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

## プロローグ 誰かの小さな独白

時々ふと思いつくことがある。

視界に映る世界は狭く、どうしようもなく汚いものだ。  
幼い僕は、ただそう思つていた。

あまりに理不尽で、ときに暴力的なそれは、無力な僕を真つ暗な  
檻に閉じ込め、せせら笑つ。

僕にとって、世界は敵だった。

決して分かり合うことのできない、残酷な敵。

闇から覗く光は、いつだって僕を苦しめる。そのくせ、手を伸ば  
せば遠ざかり、揉むことすら許されない。

でも、悲しくはなかつた。わかっていたから。

これが現実なのだと。これが世界なのだと。

……だけじゃ。

あいつが来てから、何かが変わったんだ。

「まったく現実つてのはなんともつまらないものだね。  
君はこいつまでこなとこひるこるつもりだい?  
」

誰だ。

「怖いのかい」

怖い？

「大丈夫。世界は君が思ってるよりも、ずっとずっと広いものだよ。一緒に他の世界を見に行かないかい？」

僕なんかといったら、あんたも無事では済まないぞ。

「関係ないよ。とあ、行こうつ

僕を無理矢理引っ張つていいくその手は、とても温かくて。

僕は生まれて初めて光を見た。

「ボクの名は架哉。かや。桐堂架哉とうどうかやだ」

プロローグ 誰かの小さな独白（後書き）

どうだったでしょうか？

## 第1話 軽く人生終了のお知らせ（前書き）

実力不足と無計画があだとなり、3話目にして早くも行き詰まりました（汗）

もうすぐ新年ということで気持ちを切り替えて書き直しています。

残りもできるだけ早く書き直します。

申し訳ありませんでした。

## 第1話 軽く人生終了のお知らせ

生まれてまだ17年のときしか生きていらない私は、人生を語るには未熟な存在だ。私の5倍以上もの歳を経てきた人は数え切れない程いる。彼らから言わせれば、私は世の中のことを何もわかつていないうちよっこなのだろう。

「国立ヴィードルハウス高等魔術学校中等科、フォルティニア・アリネルさんですね」

しかし、そんな私でも一つだけ言えることがある。

それは。

「あなたを王国への反逆、ひいては王の暗殺を企てた罪により拘束します」

一度終わつてしまつた人生は、一度と元には戻らないといふこと

だ。

なんでひつなつたんだろう。私の何がいけなかつたんだろう。

平民の家に生まれて、生活はいつも苦しかつた。私には、まだ幼い弟と妹がいる。少しでも親の負担を減らしたかつた。

魔術の才があるとわかつてからは、家を飛び出しお金稼ぐため

にひたすら勉強した。

平民であることを何度も馬鹿にされた。お金がなくて路頭に迷つたことや、空腹で行き倒れたことも一度や二度ではない。何度絶望したことか、何度も諦めてしまおつかと思つたことか。

それでもくじけなかつた。

だから貴族の名門と名高いヴィードルハウスに平民の身で入ることが出来たし、魔術師になる道をえ開けた。

全てが順調。 . . . . . そのはずだったのに。

「なんで . . . . . 」んなこと

人生でお目にかかることなどないと思われていた、牢屋という名の一つの終わり。

薄暗い小さな部屋は非情なくらいに冷たく、硬い床。そこには何もない。ただ絶望的なまでの沈黙があるだけだ。

王の暗殺未遂は重罪だ。いくら身に覚えがないとはいっても、たかだか一平民の私の話を人々が信用するとは思えない。いつたい私が何をしたというのだろう。

心当たりなんではない。何かの間違いだ。

そう信じたかった。

だけどこれが現実。

もう少ししたら、私は王国直下の罪人幽閉所へ移されるだろう。そうなれば私の人生は本当の意味での終焉を迎える。

普通なうひる。

普通なうひる。普通なうひる。普通なうひる。普通なうひる。

「おっしー！道が開けたな！行くぞ……つて、なんだよ。まだ敵いるじゃねーか。はいファイアーボールー！速やかに虫けらを駆除し、突破口を開け！」

「や、あのう……」

「なんだよ、ノリが悪いなあ。逃げたいんだろ？」

「そ、それはそうだけど」

「じゃあ撃つしかないな。ああ撃つしかない。ここで捕まつたら、脱出するしない以前に何されるかわからんないもんな。だつて、王の暗殺企てて、捕まつて脱走して王国の人間に散々魔法ぶつ放して、

でもつて施設の破壊活動に機密情報の奪取、貴族及び王への暴言の数々そう不敬罪！まずは拷問、いや陵辱か？知らんけど、口クな目には遭わんだろうなあ。・・・・・あ、敵来たぜ」

「・・・・・・・・・ああ、もうー『ファイアーボール』！――

特大の炎の玉が王国の兵士たちを包み込み、爆音とともに盛大に爆ぜた。

死んでないよね？ねえ、死んでないよね？自分でやつといてなんだから心配だ。もしも死人が出てたりしていた場合は・・・・・。

「直撃か。ありや 確実に死んだな。よかつたな、その輝かしい犯罪歴に多量殺人が加わったぞ」

だ、誰のせいだと思つて・・・・・・・！

私は半ば本気で泣きそうになりながら、状況を楽しんだとしか思えない少年を睨みつけた。



## 第1話 軽く人生終了のお知らせ（後書き）

今後、少女は少年にガンガン振り回されていきます。  
そのハチャメチャ感をうまく書けたらなあと思います。

## 第2話 それは運命といつてはあまつに唐突すぎて

「ハハハハハハだ！」

まわりはどこを見ても建物、建物、建物……。  
まざいな。こりや本格的に迷つたぞ。

東域で唯一『王』と呼ばれる者が存在する都市、アスラータ。  
俺がこの街を訪れたのは3日前のことだ。旅の疲れを癒すため、  
久々に観光でもしようかと思つていた。

さすがは王国。王の住む城はもちろんのこと、市街地ですらその  
辺の村4個分は収まるんじやないかという広さだ。しかも学校や治  
療所といった、よそではめつたにお目にかかるないレアな建物もあ  
るという。

そうとくればもうやることは一つしかない。

そつ、男の浪漫。すなわち探検だ！！

てなことでわざと地図は持たず、自分から入り組んだ路地に入つていつた。

で、今に至る。

歩き始めて4時間近く。ぶつちやけよう！腹が減った。

視界に広がるは無数の道。さつきから入つ子一人見かけない。

ダメだな王国。もうちょっとわかりやすい道作れよ。絶対設計ミスだろ。つかんなわかりにくい道残しとんなよ。

とはいえ、地図もなしにクソ広い王国の、しかも王国の人間すらめつたに使わないような道を進むような馬鹿がいるとは誰も思わないだろうが。

とりあえず、勘で右の比較的広めな道を選択する。先程からこんな無茶苦茶な進み方をしてるから、余計に迷うのだろうが、我が道を行くのがモットーなんだから仕方ないだろう。

俺はいつそ胸を張りながら道を進んでいった。

「なんだよ、行き止まりかよ

行つた先は行き止まりだつた。

暗い路地がこの場所だけをりてその色を濃くしていろよつだつた。

腹もそろそろ限界に近い。宿の美味しい食事が無性に恋しくなつてあた。

「ひつなりや最終手段だな。

俺は背中に手を伸ばし、そこにある麻布で包まれたものを握つた。軽く振つて布を取り去ると、現れたのはひと振りの剣だった。

「ぶつた斬るー！」

シャキン。

威勢のわりには乾いた音がし、ほんとう音もなく正面の壁が崩れ落ちる。

道がないなら作ればいいじゃなーつ！

弁償？知らないね。行き止まりを作つた王国側が悪い。そうどう？

どつちにしる、こんなところの壁を壊したくらいじゃ特に騒がれんだろう。見たところ人が住んでるようには見えんし。

「ま、なんとかなるだろ。・・・・・ん？」

壁の向こうは部屋になっていた。やけに暗く、静かなその部屋は、鉄格子に囲まれていた。

「お、お前、いつたいなにを・・・!」

王国兵の装備をつけた男が格子の外で喚いている。

えー。なにこれ。

状況がいまいち飲み込めない俺は、そこで決定的なものを発見する。

いや、人というべきか。

「あ、あなたは・・・・・?」

薄汚い格好をして鎌につながれている少女。

じつは、お姫さまが壁の間にひびきが入ってしまったのです。

### 第3話 その時何かが始まった（前書き）

相変わらずの駄文ですが、ひまつぶしにどうぞ。

### 第3話 その時何かが始まった

えつとお・・・。

私は何が起きたのかわからず、呆然とすることしかできなかつた。  
わずかに何かが斬れるような音が聞こえたのち、突然背後の壁が崩れ落ちたのだ。

感じたのはまず、眩しさだつた。そして暖かいという奇妙な感覚。頭が混乱し、何が何だか少しもわからない状態で、しかし何者が牢屋に入ってきたのはわかつた。  
私はなんとか声を搾り出した。

「あ、あなたは・・・・・・？」

ほんの少し前まで、当たり前のように聞いていた自分の声は、信じられない程弱々しく震えていて。

声を出したことで、自分を止めていた何かが突然いなくなってしまったように感じた。

「あ・・・」

今、気がついた。  
怖かったんだ。

元の生活ができなくなることにはない。人生をめちゃくちゃにされたことに対する怒りもない。  
ただ、元の自分には、幸せだった頃の笑顔の自分には戻れなくなることが。

ひとりぼっちになってしまつことが。

私は怖かったんだ。

ぼたり。

冷たい大理石の床に零が丸い模様を描いた。模様は次第に広がり、大きなシミとなつていく。

「顔を上げるよ」

上から声が響いた。優しく、だけどどこか力強い声。勇気づけられる。

「お前は、どうしたいんだ？」

私は。

私は！

顔を上げる。私の中にいた何かが叫んだ。  
そしてその瞬間理解する。私の私自身の想いを。

「また笑いたい！これまでみたいにたくさん笑って、大声出して、  
人と話したい。誰かと一緒にいたい。・・・・・私は生きていた  
い！」

知らない人に、しかもこんな状況で何を私は叫んでいるのだろう。

そう思つたら自然と笑みが零れた。  
身体が軽くなつたような気がした。

「そつか。・・・・・なら一緒に世界を見にいこうぜ」

目の前に、手が差し伸べられる。

私はその手をとつた。

「俺の名は蓮夜。 桐堂蓮夜だ」

この出会いが、のちに大陸中にその名を轟かせる大悪党を生むことになるのだが、この時点ではまだ誰も知らないことである。

### 第3話 その時何かが始まった（後書き）

どうだったでしょうか？

早く本文を変えたかったので、短めになつてしましました。  
感想等お待ちしています。

## 第4話 そして2人は逃げる（前書き）

もうすぐ新年ですね。

来年は少しでも書くペースを上げられるようにしたいです。

## 第4話 そして2人は逃げる

「さて、そうと決まればさつさと脱出するか

次第に日が明るさに慣れてくるころ、田の前に立つ少年が言った。牢屋の壁をぶち破つて入つてきたのは、私とあまり歳が変わらないであろう、一人の少年だった。

東域じのあたりではあまり見かけない闇色の髪と同色の瞳。浅黒い肌が妙に子供っぽさを感じさせる。

それに桐堂蓮夜とうじょうれんやという名前。言葉に特有の訛りは見受けられないものの、おそらくは北域の人間だろう。遠い異国の人間が、しかも私と同年代の少年がなぜこんなところに。いつたい何が目的なのだろう。考えたところでわかるわけもないが、少なくとも私の味方ではあるようだ。

ふと、少年が品定めするようにじらじらと見ていることに気がついた。

「な、なんですか」

急に恥ずかしくなり、身体を抱き寄せるとい、少年も醜の悪さつて田をそらした。

「いや、綺麗な髪だなと思つてぞ」

「な・・・・・・」

まさかこの状況でそんな言葉が飛び出すとは思わなかつた私は、言葉に詰まつてしまつた。

しかし少年はいたつて眞面目な口調で続ける。

「ここまで純粹で、だけど透明感もある真紅は見たことがないな。似たようなもので、くすんだ色なら南域の方でよく見かけたが・・・。  
・。遺伝か？」

「はい。お母さんの方の血筋が南域の方から来てて、代々赤髪が生まれるそうです。でも、私の場合は特にその血をよく引いていて、私程鮮やかな色になることはめつたにならしいです」

昔から私のことをよくお母さんに褒められた。お前は特別なんだ、  
誇つていいことなんだ、と。  
だけど  
。

「ありがとうございます。すく嬉しいです」

だけど、お母さん以外の人に褒められたことはなかつた。いつもいつも他とは違つてことでいじめられてばかりいたから。父親も、口には出さないが気味悪がついていた節がある。

本当の意味で純粹に綺麗だと言われたのは、これが初めてだ。

少年も気恥ずかしそうに笑うと、姿勢を正した。

その身体から闘氣のよつなものが滲み出る。

「鎖が邪魔だな」

少年の言っているのは、私を縛っている鎖のことだらう。王国御用達のこの鎖は魔力を無効化する作用があり、身動きを取れなくするこの他に魔法を使うこともできなくしてしまつ。しかしもちらんそれだけではない。

「あのつ・・・えつと、桐堂さん？」

「蓮夜でいい」

「じゃあ、蓮夜さん、この鎖は駄目です。これは普通の鎖ではありません。これには外部から力を加えようとすると、その者に激痛を与えるという呪いがかけられています。これまでこの鎖を壊せた者はいません。そういうものなんです。だから」

「だから、壊すことは不可能だとでも？」

「え・・・・・・」

雰囲気が変わる。少年からこれまで感じたこともないような圧力が放たれた。

私は、それこそ身体を鎖でぐるぐる巻きにされたかのように身動きが取れなかつた。

「安心しろ。俺に不可能はない」

「で、でも」

私が言い終わる前に少年は手に握つた剣を振り下ろしてしまつ。

シャキン。

「え？」

一瞬だった。

私が何かを知覚するよりも遙かに早く。

「ハツこの程度か」

私を捉えていた鎖が消え去っていた。

\* \* \*

ドゥンッ…！

アスラータ王国第三自治区西。ここは東域を中心として活動する商人の拠点となつていて、大陸中からも様々な商人たちがやってきて、旬の生産物や最新の情報が集まつてくるのだ。

今日もそれらを一早く得ようとする商人や学者で賑わっていた。

しかし、突然の爆音とともに平和な日常は混乱の渦に巻き込まれた。

「う、うわ。は、蓮夜さん、蓮夜さん！…！」

「あ…どうしたよ？」

俺は腕に抱えた少女を見る。

そう、牢屋に囚われていた少女である。

少女はそれはもう慌てた様子で「後ろ！後ろ！」おつと。とつさに横つ飛びに飛び。少女がキャッと短く悲鳴を上げる。

間髪入れず俺たちがさつきまでいた場所が爆炎に包まれた。

危ねえだろ！危うく火だるまになるところだつたぞ。つか本氣で殺そうとしてんな、奴ら。冗談じやねえぞ、焼いても頭かねえつて。

「お前何やつたんだよーー！」

「知りませんよー、こいつが聞きたいくらいですよーー！」

「ふざけんなよー、心当たりくらいあるだろー、なんだつてたかだか10代の娘一人捕まえんのにガチになつてんだよ。聞いてねえよー！軍まで出して殺しにかかるとか正氣の沙汰じやねえぞー！」

「そんなこと言われても・・・。朝起きて普通に学校行こうと思つたら、変な人に連れて行かれて。しかも王の暗殺を企てたとか、王国への謀反だ、とか知りませんよそんなことー！」

おいおいおいおい。

マジかよ。こいつ陰謀に巻き込まれたのかよ。信じらんねえ。てか俺はなんでそんな奴助けちゃつてんだよ。嫌だよ。なんつー貧乏くじだよ。

平民などの身分の低い人間がお偉いさんといいように利用され、権力争いなんかの陰謀に巻き込まれるのはよくある話だ。しかも少女の着ている服を見るにおそらくは魔法学校、それも身分の高い出でないだろう。おおかた存在そのものが邪魔で（もしくは利用しやすくて）この少女が選ばれたのだろう。理不尽な話だ。

別に俺は少女の境遇を同情したり哀れんだりするわけではない。他人がどうなるうと知ったことじゃないし、俺自身面倒事は勘弁だ。しかし今回は俺自身が密接に関わっちゃってる時点で他人事ではなくなつていて。現在進行形で命の危機なのもあまりよろしくない。早急に手を打つ必要がある。

「お前さ、魔法とか打てないわけ? さつさと蹴散らせよ」

「……て、助けてくれるんじゃなかつたの! ?」

「だつて俺平和主義だし。兵士怖いし。赤の他人のために手汚すとかありえないから」

「ええ! ?」

なんでそんなに驚いた顔をするんだ? 当然だろ。世の中いつだって大切なのはギブ＆テイク。ハイリスクノーリターンで動く慈善精神に溢れた人間なんて神話の世界の話だ。現実を見ろ現実を。

「ならなんで助けたんだろ? な・・・」

「本当になんで助けたんだろ? な・・・」

あれは偶然が生んだ衝動的なものだ。あれを俺の意思だと言うには非常に不本意なものがある。ただ、一目この少女を見たときに思

つてしまつたのだ。

似てゐるな、と。

なぜそう思つたのかはわからない。今から思うとそれこそ正氣の沙汰としか思えない。  
ただ直感的に。

俺の中の何かが運命を感じちゃつたりしていたのかもしれない。

それは俺にとって暴力的なまでに衝撃的な出会いだつた。

「う、うわっ。もう知りません！ 摺らめく意思よ、創まりの契い火  
を以つてこの手に集え！ 『ファイアーボール』」

「へえ。やればできるじゃねえか」

「もう、もうっ！蓮夜さんも何かやつてくださいよー。」

一つの日が、この出会いが新たな何かを生むことになるのだろうか。

今の状況を少しばかり楽しみながら、俺は少女を抱えて走り続けた。

第4話 そして2人は逃げる（後書き）

どうだつたでしょうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0636z/>

---

成り行きで悪人になりました

2011年12月31日17時49分発行